

「コペルニクスたちへの提言」

Carlo C. Perfett

ミヤモト、そして親愛なる日本の友人たち、神戸の学会に出席できずに残念だ。出来れば行きたかった。なぜならRizzello先生が説明したはずだが・・・

今、我々の認知運動療法に変化が生じているからだ。

認知神経リハビリテーションとしての性格をさらに強めている。

今我々が試みているのは、認知神経リハビリテーションとは何かを定義することだ。定義すること自体が重要なことではないが、我々のリハビリテーションが他とどう違うのかを説明できなければならない。

認知神経リハビリテーションが、伝統的な理学療法や作業療法と異なる第1の特徴は、「精神」と「身体」との関係の捉え方にある。

我々は、精神と身体は別々ではなく、一体となってユニットを形成していると考え。だから、「身体化された精神」という言葉をよく使う。

あるいは少し変えて、「精神化された身体」なんて言葉も使っている。これが臨床現場で何を意味するかというと、膝や足に治療するとき、骨や筋や腱そして脳に働きかけるのはもちろんのこと、患者の心的側面にも働きかけるということだ。神経科学者たちが盛んに研究を進めている心的過程、つまり意識や自己移入・・・あるいは運動イメージにも働きかけて行くことなのだ。

第2の特徴は、「主観」と「客観」に対する姿勢だ。

反射を活用する伝統的なリハビリテーションでは、客観を優先し、主観と客観とを厳格に区別してきた。我々は主観と客観には基本的な差異はないと考えている。例えば「運動イメージ」だ。運動イメージはとても主観的なものだ。

私の運動イメージは私のものだ。私が何を感じ、何を体験しているかに意味がある。しかし、認知神経リハビリテーションで活用される運動イメージは、客観的に評価できる成果を生むことができる。ユーとコールの論文を覚えているか？運動イメージによって筋力が30%も増強されたことが示されていた。

パスカルレオーネの論文についても議論したね。つまり、主観と客観との関係をどう捉えるかが我々のリハビリテーションの第2の特徴なんだ。

第3の特徴は、「部分」と「関係性」の問題だ。

我々は要素間の関係を重視している。

要素それ自体よりも、諸要素が作り出す関係性の方が重要なのではないだろうか。我々は人間をシステムとして考えている。システムは諸要素からなり、それらの要素間の関係性によってシステムが組織化されていく。

我々の作業に基本はここなんだ。

「個々の要素」と「関係性」を区別する考え方も我々は克服していきたいと考えている。昨年のマスターコースでは手の運動がテーマだったね。手の運動を捉えるとき、一本の指の運動だけを研究していたのでは意味がない。

重要なのは、それぞれの指の間に作り出される関係だからだ。

第4の特徴は、「自発性」と「組織化」の問題だ。

多くのリハビリテーション手法は、自発性に頼っていると言えないだろうか。セラピストは患者が自発的に一人でもやろうとすることを介助しているのだ。例えば、歩けない患者がいる。

セラピストは患者を介助して歩かせる。

歩容は別として、とにかく歩かせる。

腕を伸ばして物を取ることが出来ない患者がいる。

セラピストは腕を伸ばすように指示する。

・・・という具合だ。

我々は本当の機能回復は、

運動の組織化にあると確信している。認知神経リハビリテーションでは、

患者の自発的な活動自体を対象として治療するのではない。

システムとしての身体を組織化する能力を対象に治療する。

つまり、諸要素間で新しい関係を作り出していく能力を対象に治療するのだ。

最後に挙げる第5の特徴は「言語」だ。

カバットやボバース、あるいはボイタの書いたものをもう一度読み直してみると言語についてはほとんど何も言及されていないことに気づく。

一方、我々は言語を重視している。

今年の将歌一コースでは「患者と話す」というプロジェクトを日本のセラピストにも紹介したね。我々の治療システムでは言語は大きな意味を持っている。言語は患者とセラピストの関係を変化させることも出来る。

言語は患者と、患者が向かい合う対象物との関係を変化させることが出来る。治療における言語の使い方こそ、我々のリハビリテーションの最大の特徴かもしれない。そこで、今回のトネツァでの勉強会は運動イメージと言語をテーマにしている。運動イメージはいわば我々のリハビリテーションのエッセンスと言えるかもしれない。運動イメージは「精神」と「身体」の間にあるものだ。運動イメージは「自発性」と「組織化」の間にあるものだ。

運動イメージは「部分」と「関係性」の間にあるものだ。そして運動イメージは基本的に言語なんだ。だから、今我々は運動イメージと言語を集中的に勉強している。かなり以前から運動イメージは活用してきたが、その活用の仕方についてあまり正確に評価してこなかったという反省がある。そこで、運動イメージの活用をもう一度見直していこうとしているのだが、これには日本の皆さんにも是非力を貸してもらいたい。我々が研究のために考案したカルテや記入シートは、Rizzello先生が紹介したはずだ。

よかったら、こうした資料を使って、是非我々のプロジェクトに協力してもらいたいと思う。

ありがとう。

「よい仕事を。また会おう。」

2009年6月5日トネツァにて

(翻訳：小池美納、撮影：鶴埜益巳)